

肥後医育振興会の更なる発展を



熊本市医師会長 福島 敬祐

財団法人肥後医育振興会は平成八年の熊

本大学医学部創立一〇〇周年を記念して、熊本大学医学部同窓会（熊杏会）および医学部後援会によつて設立され、本年で十五周年を迎えられたことを心よりお慶び申し上げます。創立時の徳臣理事長はじめ関係各位のご尽力によりまして、幅広い活動を展開され、今日の確固たる礎を築いてこられました。徳臣初代理事長、岡崎第二代理事長から現在、神原第三代理事長へと受け継がれて昨年一月には、創立以来の念願でありました公益法人格を得られました。本会は、若い医師の教育・研究者の育成、「肥後医育塾」の開催や「あれんじ」の発行など市民への健康増進および地域医療の向上を図るための医学・医療情報の提供を行うなどの活動や新しい事業として「熊本県医療人育成総合会議」を計画して、地域医療を担う各種医療人の育成（医育）のあり方を探る会を設立し、盛んな事業を展開されておられます。

さて、近年、医学・医療のめざましい進歩により世界屈指の長寿国になりましたが、医療政策の変化も大きく、永年にわたる医療費抑制策により、厳しい医療環境となり、勤務医の労働環境の変化が産科、小児科、救急医などの一部診療科の医師不足を招き、医療提供体制の崩壊が起りました。また、

新臨床研修制度開始による、研修医の大病院への集中、志望専門外科の偏りが加速され、その結果地方の医師不足・偏在は更に顕著となり、地域医療の崩壊が叫ばれています。一方、世界に類を見ない少子高齢化が進み疾病構造が変化する中、医療のあり方も変化が求められています。高度で先進的な医療が求められる一方で、プライマリー・ケアなど初期治療も重要視される専門医とかかりつけ医が役割分担をして受け持つ病診連携が重要な医療体系となつて来

ました。こんな状況の中で、医師養成についても、わが国の医学・医療ニーズに対応した医師の養成を図るための検討が行われており、医師不足と医師の偏在の解決に向けた臨床研修医制度の見直しが検討されています。

また、近年の医療はメディア、関連企業、行政、コメディカルと多種の職種が複雑に絡み合っています。情報も複雑化し、市民のためになる正しい情報を提供する必要があるとあります。その意味で、これまで本会で実践されてこられました一般市民への正しい医療情報の提供を始め、諸種の啓発活動に敬意を表し、更なる展開を期待しております。

最後になりましたが、肥後医育振興会が今後益々発展されることを祈念致します。

財団法人肥後医育振興会に期待する

新しい医学教育の流れを乗り切る



熊本大学大学院生命科学研究部長・大学院医学教育部長・医学部長 竹屋 元裕

熊本医科大学時代に病理学の教鞭をとられた鈴江懐（きたす）教授が医学教育をなぞらえて、「みんななるなるべしならせ枇杷の花」という句を残されています。枇杷の花はみんな実になるとのことで、医学部の学生は優秀なので、放っておいてもみんな立派に医者になるんだという意味のよう

です。確かに、鈴江教授の時代、いや十数年ほど前までは、医学生は誰でも一人前の医者になっていったと思います。部活動に精を出して再試に追いまくられても、最終的には帳尻を合わせて何もなかった様に卒業し、立派な医師として活躍されている方々を数多く知っています。ところが、今の時代は、学生は放っておくと一人前の医師になれないのが現実です。学ぶべき知識量が大幅に増えたこともあり、医学の勉強に意欲が湧かない学生が増えている様

子です。医師国家試験に合格し、サラリーマン医師という安定した職業に就くことだけが目標で、医学部の卒業は単に受験資格を得るための手段に過ぎないと考えている学生をしばしば見受けられます。十八歳人口の減少と、それに逆行するように医学部入学定員が増えたことも一因と思われます。医学生のレベル低下は全国医学部長会議でも議論の的となっています。本学でも上位二／三は従来の医学生のレベルと同程度ですが、下位一／三程度の学生には基礎学力の不足を感じています。これを解決するためには、入試における選抜方法を再考する

必要があります。医学部の教育カリキュラムも学生の意欲をかき立てるような新しい形に変えていく必要があります。医学の進歩に伴って増え続ける医学知識を効率的に教授するために、平成十三年から全国共通の「医学教育モデル・コア・カリキュラム」が導入され、十年が経過しました。この間、「コア・カリキュラム」に対応するため、全国の医学部（医科大学）で少人数教育を基盤としたテュートリアル教育や PBL (Problem-based Learning) などの新しい教育手法が導入されました。本学医学部でも様々なカリキュラム改革を進めてきましたが、さらにきめ細かな医学教育を実施するため、昨年十月に「臨床医学教育研究センター」を設置し、医学教育の専任ポストを用意するとともに、今年度内の竣工を目指して、三階建てのセンター棟を建設中です。この建物には一〇〇名収容の多目的室と八名収容のテュートリアル室十五室が整備され、ハード面でも新しいスタイルの医学教育に対応出来ることとなります。同センターの活動が軌道に乗れば、本学における医学教育システムが大きく発展するものと期待しています。このたび、肥後医育振興会が公益法人第一号となり、ますます発展が期待されますが、肥後医育の中心的存在であり、地域医療の基盤となる人材育成を担う本学の医学教育に一層のご支援を戴けると有り難いと存じます。